マチ場の感覚表現と民俗

板橋を中心に

小林忠雄

❶都市の地域特性

「マチ場」の概念

最初に、民俗学の立場から都市をどのように捉えるか、ということからお話ししたいと思います。

これまで民俗学では都市社会を対象にした民俗学研究を「都市民俗学」という言い方をしてきましたが、その場合の「都市民俗」の概念は必ずしも明確ではなく、「都市の民俗事象」とは一体何を指しているのかという問題が常にありました。いわゆる今日のようにより複雑化した都市社会における具体的な都市の民俗の実態については、非常に不可解な面があるからです。

このように現代都市の民俗対象がきわめて捉えにくいことから、これまで都市民俗研究があまり進まなかったのではないかと思います。その大きな理由の一つには調査研究上の基本的な考え方、つまり研究上のベースの部分としての概念自体をもう少し明確にしておく必要があったのではなかったかと考えるからです。

そこでまず最初に都市の概念について、この数年間考えてきたことを申し上げますと、まず民俗学の立場から考える都市には「マチ場」という対象があると思います。

もともと民俗学とは日本人が日常的に使う言葉、すなわち生活用語（民俗語彙）において、それが何を指し示した言葉なのか、どういう意味で使われた言葉なのかということを明らかにしてきた研究分野だと考えます。そのように考えると、ここで言うところの「マチ場」という語彙には、どのような意味や実態が含まれているのでしょうか。

本来、「都市」という言葉は、分析概念であって記述用語であります。実際には何ら具体的な対象を指して使っているのではないことから、日本ではむしろ、「マチバ（場）」という言葉の方がより都市を表す言葉として分かりやすく使いやすいのではないかと考えます。

ここでは自分なりの「マチ場」のとらえ方を述べますと、「マチとは地域社会の政治経済活動の中心であり、不特定多数の雑多な職業を営む人々が集住し、ムラよりはより複雑な社会的仕組みを構成し、そこにはヒト・モノ・ハナシ（情報）が集中し、様々な種類のワザ（技術）が蓄積され、また洗練された華やかな感覚表現を内包した消費文化を誇り、多分に匿名的な性格をもつ競争社会である」と言うことができます。

しかし、この場合の「マチ場」には、近世以前からの「マチ場」もありますが、近代以降にはもうひとつ別の巨大な「マチ場」が、われわれの周辺に立ち現れたもので、それが「トカイ」という社会です。

この「トカイ（都会）」という言葉ももともと呼称として使われ、例えば我々の日常生活会話の中では、「うちの息子はトカイに行っている」、あるいは「トカイの人たちは皆ハデな生活」などと、しょっちゅう登場します。

それは「マチ」の場合も同じですが、ムラ（村）の人が「ちょっとマチに用足しに行ってくる」という言い方があり、また「マチのもん（者）は狡い」などと批判的な言い方もあるように、マチも日常会話によく使われる言葉であります。

このように私たちの日常生活の中には、言葉として使い分けている「マチ」と「トカイ」という二つの「空間概念」があると考えます。この二つの概念を見比べたときに、「マチ場」というものがもう少し明確になるのではないかと考えます。

まず「マチ」ですが、「マチ場」とは当然重なりますが、マチは地域社会の政治や経済・文化の中心であり、周辺農村との関係が非常に深い。民俗学では以前から「都鄙連続体論」という問題を取り上げてきましたが、その場合の「マチ」というのは「トカイ」よりもより農村との関係が深い。特に伝統的なマチとムラとは日常生活の上で個々の人間関係を非常に重視する性格があると思われます。

もう一つは、マチには三世代以上を経た家がある程度存在するという性格です。その場合のマチには伝統的な祭礼や年中行事、人生儀礼などが基本的にあって、農村民俗とはまったく異なった「マチ場」独自の具体的な民俗事象があると考えます。

そしてマチには伝統職人や老舗の商家の人々が、町衆として一定の地縁集団を形成し、またそこには、何らかの遊興空間が存在します。

以上のような生活空間を仮に「マチ」と考えます。

これに対して「トカイ」はどのような生活空間として捉えることができるのでしょうか。

私たちはいまだかつて「トカイ」というものの全貌を、具体的に把握する方法は手にしていないと考えます。特にその空間的な規模については、自らの体験のなかでは把握しきれていない、むしろトカイとは近代メディアなどの情報収集手段によってしか把握できないような大規模な「マチ場」なのだと考えます。

特に、トカイは近世以降に政治・経済・文化がより集中し、向都離村による農村移住者あるいは芸人などの非定住者の人たちが集まるようになり、より流動的な過密社会になったのではないかと考えます。

それからトカイには常に先端技術というものが集中しますが、本来「マチ場」では初めから技術そのものを重視してきたもので、さらに西洋からもたらされた新技術を駆使する人たちによって再度新たな社会組織が形成されたものと思われます。そしてこうした新たな社会組織は職住分離の必要性に迫られ、それにともなってトカイ周辺に広範囲にわたり交通網が敷設されていきます。

またトカイでは特に海外からの情報・技術、モノ、感覚表現（ファッション）などが絶えず移入されることから、感覚の世界においてもより先端的な場所と目され、常に刺激的で変容可能な大衆文化と盛り場を次々と形成してきたことが考えられます。以上のような生活空間を「トカイ」と考えます。

一方こうした性格の「トカイ」というのは、わが国では東京・大阪・福岡・札幌などの大都市が入りますが、このような都市は次第に「マチ」が近代以降に「トカイ」化したもので、東京以外では地方都市が「トカイ」の性格を次第に顕著にしていく傾向があり、そういう諸現象は周知のことだと思われます。

また、「トカイ」という語彙は、古くから使われた言葉であり、『続日本紀』に大宰府を「天下之一都会」と表現されていることが知られています。

このことについては歴史家の塚本学氏が既にお書きになっていますが、ヒトとかモノとかが集まってくる場所、すべて集まるという性格が、「トカイ」という言葉の中に含まれていると述べています。

したがってトカイと言う生活空間はモノの集中化や物量の問題、すなわち全体の規模の問題でもう少し議論する必要があろうと思われます。

先ほど述べました「都市民俗学」では、これまで総じて「トカイ」空間および「トカイ」化を対象とした民俗、現代風俗の事象を主としてきました。が、一方では「都市民俗学」を「現代民俗学」というふうに置き換えた言い方もあるように、現代の「トカイ」生活の中で展開される諸々の事象を対象にしようとする動きもあったのですが、それ自体は印象的であり明確な理論的構造を示すことができなかったことも事実です。

その点を考慮にいれますと、もう少し「都市民俗学」では基本的なところでの都市の構造理解ということが必要ではないかと考えます。つまり、農村民俗に対して都市の民俗は何なのか、どこが違うのか、どのような構造的違いがあるのかという問いかけに、私たちはもっと明確に答える必要があると考えます。

そのことは基本的に「マチ場」というものをどのように考えるか。さらにその中で全国にある様々な「マチ場」が同質の形態なのかどうか、性格的に同じものなのかどうか、そういう問題をもう少し厳密に分析する必要があると考えます。

都市民俗論的視点から見た地域特性のテーマ

そこでここでは最初に地域特性ということを念頭に置きます。しかし、この問題については私はまだ充分に把握しているわけではなく、今まで調査した中では、自分自身の基本的なフィールドである城下町の金沢市、岩手県の遠野市、熊本県の人吉市などを対象に地域性を考えるしかないと思っております。

また私は昨年のこの研究会で見ていただいた富山県の八尾の映画を製作しましたが、その中で私が特に示したかったことは、いわば「マチ場」の性格・特性を考えるときに必要な、基本的な社会集団の構造や生業の構造を、マチ場の成立過程による分析からは決して何も出てこないということが分かりました。むしろ、地域住民の現実生活の展開を通して、その中に蓄積されている文化内容を分析していくことからしか理解できないことが分かったのです。

この「風の盆ふぃーりんぐ」というタイトルの映画では、祭礼・年中行事・人生儀礼における行事の方法の具体的な展開例を見たのですが、その中で特に注目したのは、行事の集団組織ではなく、感覚表現的なものにおける地域特性についてでした。

元来「マチ場」の情報、ヒトとモノの流通には様々な違いがあると思われます。私が近年調査した岩手県の遠野市の場合、かつてマチの人々にとっては様々な情報が大きな価値要素を持っていて、ある時代、すなわち江戸後期から明治初期にかけて、その時々の情報が人々の意識のなかでは常に最優先していたとされ、こうしたマチ場の情況は大変注目されました。

それは遠野のような小さな城下町であっても、人より先んじてより先端的な情報をいちはやく入手することにより、自らの暮らしを楽にすることができるとマチの人々は信じていたからです。

具体例を一つ紹介しますと、ある遠野の市中の老舗の旅館をしていた家は、明治の初年までは獣医でした。しかし当時その家の主人は新しい情報を確実に入手したいがために、商売替えをして旅館を始めたと言います。それは旅館は他所から来た旅人が泊まることにより、先端的な情報を確実に得ることができたからです。

このようにマチ場は、数多くの旅行者を逗留させる機会をもつが故に都市なのだと思います。

もうひとつ「マチ場」には、技術と感覚表現の変容の問題があります。本来「マチ場」には、自分たちが土地を持たないということから、腕一本、あるいは蓄積した知恵でもって生きていかなければならないという社会的制約があり、そのため職人に限らず広い意味での技術（生活技術を含む）が「マチ場」にとって極めて重要なものとなります。

しかもその技術は決して固定的なものではなく、常に変化する必要があり、変革を余儀なくされる性格のものです。

同じような意味で感覚表現においても同様の性格があります。これは、元来技術というのは生産レベルでの問題、一方で感覚表現は消費レベルでの問題であり、その両方が都市社会では常に変革を余儀なくされる性格のものだからです。

従ってこうした変容の問題点に注目していくことによって、「マチ場」という性格が次第に明確になるのではないかと考えます。

その他、「マチ場」の地域特性に関しては遊興空間もテーマとして考えています。これらのことが、都市の地域特性を表出していくテーマであろうと思います。以上が私の考える「マチ場＝都市」を民俗学がどのように捉えればよいのかという主要な問題提起であります。

❷「マチ場（マチ・トカイ）」における民俗の変容構造

先に述べた民俗の変容の問題を再度考えますと、もちろん農村社会においても民俗の変容は必ずありますが、農村に比べると明らかに「マチ場」の民俗の方が、かなり早い速度で変化するのだろうと思います。

現時点でこれまで私が観察してきたマチ場の民俗事象の中で考えられることは、近代以降において生じた「マチ」が「トカイ」化する過程で民俗がどうなるのかという点について、図1で示したような変化のパターンがあるように思われます。

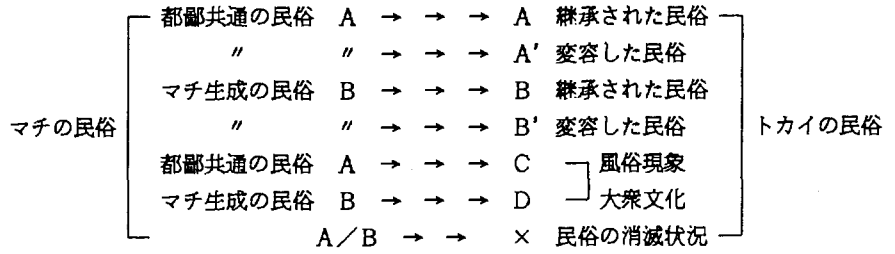


図1　マチ場（マチ・トカイ）における民俗の変容構造

ここでは具体的事例はともかくとして、まず「マチ」の民俗は「ムラ」との関係が深いことから、本来共通した民俗があります。また「トカイ」の民俗の中にも部分的に継承されたものもあります。

一方では、民俗事象の形態が変容し、また意味内容が変化したものもかなりあります。

さらに「マチ」が独自に、「マチ」という生活環境の中で形成してきた民俗も考えられます。その場合「マチ」独自の民俗においても、継承さ

れたものと変容したものとがあり、特に都鄙で共通の民俗はいっそう形を変えたものになる傾向があります。

そして民俗の何らかの片鱗を一部に残しながらも、現代風俗や今日的な大衆文化などの中にて変容したものがあります。マチが生成した民俗も同じように考えられます。

さらに、圧倒的に多いのが民俗の消滅状況です。マチが「トカイ」化することによって、完全になくなってしまったものがあります。これが今日では大半であろうと思います。

しかし、他方では新たに「トカイ」の民俗も生成していて、近代以降に全く新しい現象として立ち現れてくるものがあり、それは従来の民俗と拮抗した関係にあると考えられ、そのことにも注目していく必要があると思われます。

すなわち民俗の変容は、事象の変化だけを追いかけてもあまり意味がない。むしろ、何がどのように、どの部分が相互に作用していくのかという実態を確認していく必要があります。このことは、いわば、変容のプロセスの問題を重視するということです。

❸「マチ場」の伝承構造――民俗的思考とその回路構造――

「マチ場」の民俗や「マチ場」の伝承の問題について、たとえば技術と感覚表現の変容の構造がどうなっているのかという点を考えるときに、変容の中身を考える必要があります。

まず、民俗の伝承とは、「人間の身体に無意識に蓄積された地域社会に共通した民俗的思考（知識・感覚・行動）の表出形態である」と言えると思います。ただし、民俗学では様々な考え方がありますので、この定義だけに限定するものではありません。またこの場合の民俗的思考とは、私たちが民俗の範疇を規定していくために重要な意識構造と身体の回路構造のことを指しています。従ってこのことを意識しながら民俗の変容を考えていくべきではないかと思います。

また、「マチ場」の伝承構造を再度考え直してみると、最初に述べたような生産レベルでの技術と消費レベルの感覚表現が、いくつかの外的要因によって変容を余儀なくされています。

しかし、こうした旧来の技術や感覚表現が「トカイ」の民俗に変わったとき、その変容のプロセスの中には必ずや民俗的思考を通じたものがあるのではないかと考えたいのです。

例えば私がこれまで研究対象としてきた明治初期の科学技術や色彩感覚を検証してみると、外来の文化（特に西洋のもの）が、近代以降の日本に輸入されたとき、その外来文化をそのままストレートに受け入れて表現・行動してきたのではなくて、そこには必ず「日本化」という変容過程の作用が含まれています。このときの日本化という変容過程とは、いわば先述の民俗的思考のプロセスを経ることそのものを意味し、そこでは民俗的思考におけるある種の作用によって、新たに表出されたものがあるのではないかと考えています。

特に感覚表現では西洋的なファッションの導入や新たな色彩感覚、そしてそれまで無かった人工音などの表現が都市の問題としてきわめて注目され、そこには日本人の根底を覆すような基層感覚の変容を余儀無くさせられたのだと思われます。

さらに、こうした感覚表現はアッというまに受容され、次いで日本人に極めて合ったものに作り替えられたことが考えられ、そうした表出の仕方を今日の都市の様々な事象のなかから捉えておく必要があると思います。

以上が、「マチ場」の民俗の地域特性を考える視点の一つとして提示しておきたいことです。

❹関東の「マチ場」の事例から

近世板橋宿の「マチ場」化の要因

次に、関東圏のマチ場の事例として板橋をとりあげ、これまで述べてきた都市民俗の問題を考えていきたいと思います。

『板橋区史・通史編・上巻』によると、近世において「マチ場」は、図2のように展開していたことがわかります。その中に私が前述に指摘した点が見られるので、ここではそうした注目した部分のみを取り上げてみましょう。

また、同じく『板橋区史・通史編・上巻』によれば、近世板橋宿の「マチ場」化の要因は、次のようになっています。

慶長七年（一六〇二）に伝馬制度が成立し、板橋は宿駅として機能し始めました。そして貞享二年（一六八五）には「下板橋町」というように、ここでは「マチ」という言葉が記載されています。

江戸後期の町並の長さは一五町四九間（約一・七キロ）で、平尾宿・中宿・上宿とに区分されています。

人口や家数も図3にありますように、江戸後期になるとかなり急激に増えています。

そしてこうした「マチ場」を形成している主な職業は、地借五八・店借一二四とあるように、新たに商いをする者がかなり増えてきたことが分ります。

また板橋宿は中山道と川越街道の分岐点にあり、最初に下板橋宿の方が先行してつくられ、後で川越街道の方に上板橋宿が生まれます。この二つの規模を比べて見ますと、かなりの違いが見られます。したがって板橋宿は近世の宿場町というものが展開していく典型的な事例の一つと思われます。

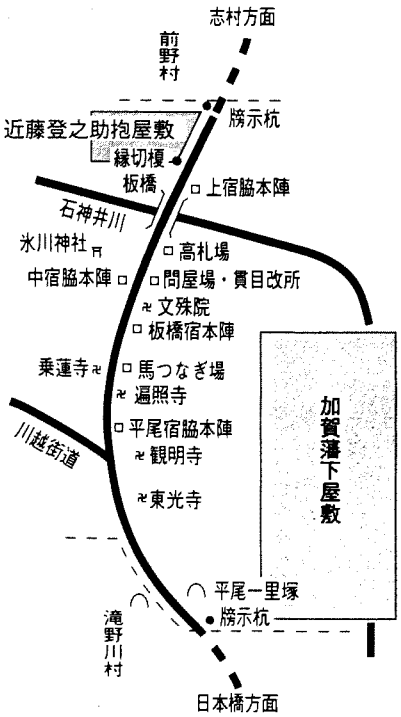


図2　近世板橋宿の概略図（『板橋区史・通史編・上巻』より）

特に近世後期の特徴として板橋宿では遊郭が非常に発達しております。最も江戸に近い方の平尾宿では、図3にありますように、非常にたくさんの「何とか屋」と称する店があります。このように後期になると遊郭の店がどんどん増え、遊興施設というものが「マチ場」空間のある位置を占めるようになったという点がここでは注目されます。

板橋宿にみる「マチ場」の性格

さらに板橋宿の「マチ場」の性格を最も性格付けている要素を取り上げたいと思います。

まず、ここには非定住者の集住化という都市化要因があげられます。

ちなみに『板橋区史・近世編』の記述には次のような事例を取り上げています。

かつて加賀藩の今枝民部という上級武士が、元禄七年（一六九四）に記した紀行文『甲戌旅行日記』の中に、「この宿に潰れ者散在し、遊女もあり、江戸ちりにてあふれ者の集まる所なれば気遣はふかし」と書いています。つまり江戸時代のかなり早い時期に、大量の非定住者がこの地域に集まり、その結果板橋宿の「マチ場」化が急速に進んだことがこの

ことから窺うことができます。

次に、再び遊郭についてですが、『板橋区史・近世編』によれば、天保年間に記述された『岡場遊郭考』に、「昼ハ見世格子ヲ取、六尺程内ニ丸竹ニて仕切、見勢をはる事ニなりぬ、夜分は格子ヲ〆、已前の通り」とあります。つまり板橋遊郭の昼と夜とでは雰囲気が明確に異なっていたことが、この記述から窺うことができます。

また、板橋では長屋の存在が注目されます。図4にありますように、伊勢屋孫兵衛家文書の長屋の購入状況から当時の長家の居住形態がよくわかります。一般に都市化とかマチ場化の要因を指摘するとすれば、長屋のような貸家の存在が大きいと思われます。これは江戸の生活慣習の影響なのではないでしょうか。

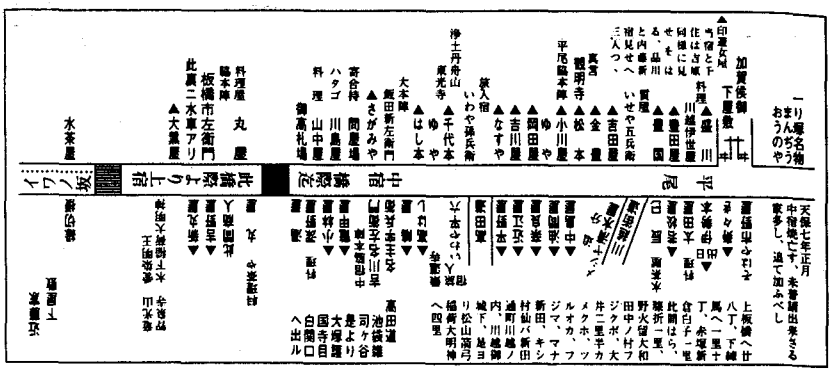


図3　近世後期の板橋宿（『板橋区史・通史編・上巻』より）

次に、町並の構造ですが、板橋宿は近世の典型的な両側町を形成しています。しかし後ろはすぐに田畑になっています。図5にありますように、間口は狭く奥に長い敷地になっていて、典型的な宿場形態の様相を見せております。

しかし、近世後期になって非常に発達した上板橋宿の復元図によりますと、家が点在していて一戸の家の周りの敷地が広く、農家形式の佇まいを見せていることがわかります。

このような上板橋宿の敷地形態の事例は他の地方にも、同じようなタ

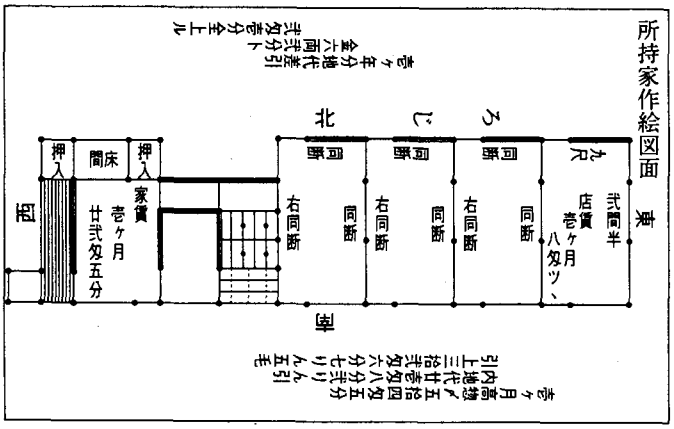


図4　文久元年（1861）伊勢屋孫兵衛購入の貸長屋
（『板橋区史・通史編・上巻』より）

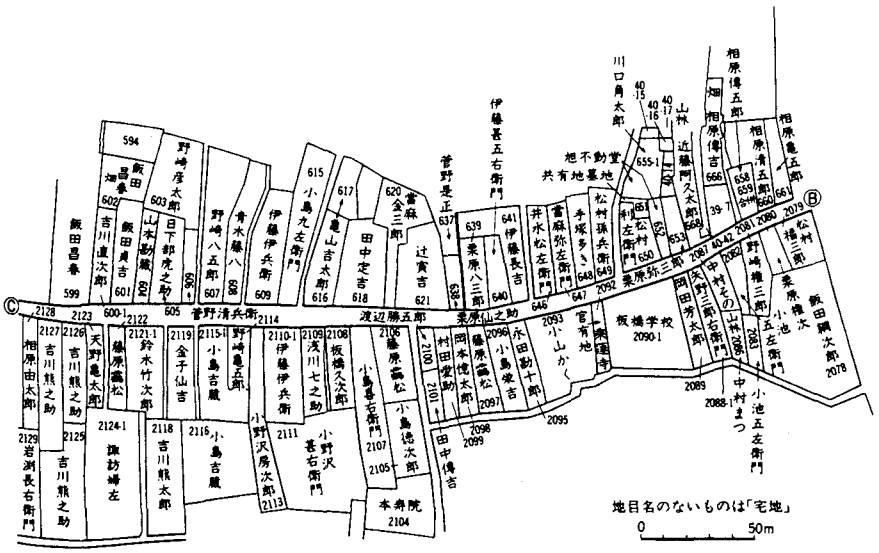


図5　明治20年頃の板橋（『板橋区史・資料編5・民俗』より）

イプが見られます。例えば石川県の金沢市に隣接する野々市町という宿場町があります。それは旧北陸道に沿った金沢の中心から六・七キロ西方に離れたところにあります。近世初期に成立したこの宿場町は、同じく近世初期に成立した上板橋宿と全く同じ、農村とマチ場の中間的な空間構造の形態を持っていることに注目されました。

さらに板橋宿の町家の家屋構造についても見ていきたいと思います。

図6は、五十嵐家の平面図です。明治年間のものですが、手前に「オミセ」という空間があり、後ろに「オク」があって、奥に細長い典型的な「マチ場」の仕舞屋風のものです。建物を見ると、家屋の構造が二つの棟を連続させている構造になっています。特に、「オミセ」の空間が平入りとされ、屋根が前と後に分かれています。そして、その後の「オク」の部分は別棟の形態とし寄棟造りになっています。つまり、この民家は二つの家を繋いで成り立っているのです。

なお、同じく板橋の藤野家も全く同じ形態になっています。手前にある精米所と「アガリッパナ」の空間が平入りで格子を施した部分になっています。そして後方に別棟の建物が繋がっています。

前述した北陸の宿場町、野々市の町家も全く同じ構造を持っています。手前に平入りの建物があり、格子を前面に施して仕舞屋形式を強調しています。そして後方にはこの地方の典型的な農村建築の建物があり、この二つの形式の建物を繋げた形になっています。こうした町屋と農家を合体したような形式は、明治以降に生み出されたものであることが最近の調査で分かっています。

つまりここでは、以前から住民のなかに「マチ場」志向が働いていて、「マチ場」とはこういう形態でなければならない、すなわち平入りの間口の前面には格子を施した正面飾りが必要であり、「マチ場」を「マチ場」らしく見せなければならないという意識が、明治以降に急速に働いたことが考えられます。

板橋の場合も、明治初頭から明治二十年代にかけての時期に、道路に面した前側を町屋風の構造に改築していったことが考えられます。従ってこの時期の全国の「マチ場」は、マチ場にも色々ありますが、京都や江戸などいずれかのモデルを殊更意識して形成していったことが考えられ、そして出来あがった形態は元からあったマチ場形態とはかなり違うのではないか、という点が注目されます。つまり、このことは明治以降

の近代の出現による新たな感覚表現や感覚作用の働きの結果であり、そうした感覚から新たな町家形式が作り出されたのではないか、ということがここから言えるように思われます。

❺板橋の民俗儀礼から見た都市的性格

最後に、宿場町の民俗と関係する儀礼について『板橋区史・近世編』の記述からいくつか見てみましょう。一つは、「さかむかえ」という儀礼です。これは、伊勢参宮が盛んな折、江戸の人々が代参者を迎えて祝う儀礼が宿において行われていました。そしてマチ場の人たちや親戚の人たちが迎えて宴会を開きました。こうした迎える儀礼とは逆に、旅立ちの方を「さかおくり」と言いますが、「さかむかえ」の方が盛大であったと言われています。この「さかむかえ」の「さか」という言葉は何を指しているのでしょうか。江戸から見て板橋は城下町圏の境の場所で、そこまでは見送る・迎えるということになっていたと言われています。すなわち江戸の人たちの意識のなかに、そのような構図があったのでしょうか。ここでは板橋が江戸の境界地という点に注目されます。ちなみにこの「さかむかえ」の同じ儀礼が品川にもあったようで、品川の場合は江戸の人たちが大勢行ったことから、次第に板橋の方が減少し始めたと言われています。これは両者の遊郭の質が品川の方が上であったからで、板橋を低く見ていたと説明されています。さらに江戸の入り口という点でも性格付けが違うということにも注目されます。

次に、鳶について見てみましょう。板橋の近世社会において中心的な役割を果たしていたのは鳶の仲間のようです。江戸時代には、鳶の親方という存在はかなり「マチ場」を仕切っていたことがあります。これが近世からのものなのか、あるいは後の時期にそうなったのかは分かりません。以前に民俗学の岩本通弥さんが古河の城下町を調査したときもマチ場を仕切っていたのは鳶が中心であったと述べています。従って関東の「マチ場」では、鳶職人の存在が大きな位置を占めていたと考えられます。しかも年中行事には中心的な役割を担っていた点が注目されます。

次に、商家の年中行事について見てみましょう。かつて正月の二日三日には年始廻りをしましたが、そのとき丁稚が年賀の半紙か手拭を近所に配っています。これはおそらく江戸・東京の影響があって、同じものを持っていったと思います。また、注目したいのは、江戸も同じですが、商家では出入の職人に、その家の家紋もしくは屋号を印した紋入りの半纏を配るという慣習があることです。職人はその半纏を着て年始に来る、あるいは立ち回り、さらにその家の結婚式などめでたいときには駆けつけるということがあります。これは全く江戸の習俗と同じです。江戸の商家のしきたりが板橋にも伝わってきて、同じような展開を見せていたという点が注目されます。また、板橋は昭和七年（一九三二）に東京市に編入し、その時八月盆から七月盆に変わりました。こうした暦についても板橋での変わり方は早く、板橋にはそれだけ東京の新しい慣習がいち早く浸透していったことが考えられます。

また、十一月にお酉様の行事がありますが、板橋の人たちは以前から浅草の大鷲神社にほとんど行くことになっています。このように浅草と板橋との関係は非常に深く、江戸時代から舟運を利用した往来が盛んでした。従って板橋の若い衆が遊びに行くところは必ず浅草であり、舟を利用することが多かったようです。宿場の場合、私たちは街道のつながりだけを考えますが、実際の生活では舟運の利用が様々な展開を見せていました。また、板橋の下肥集荷について見ると、街道を牛車で運ぶ場合と、舟で運ぶ場合の二通りがありました。もちろん、同じ板橋でもすべて一様ではなく、運河に近い場所は早くから舟運が盛んだったようです。舟は大量に運べるので値段も安く済むという面もありました。このように考えると、交通の形態が及ぼす影響は大きいと思います。

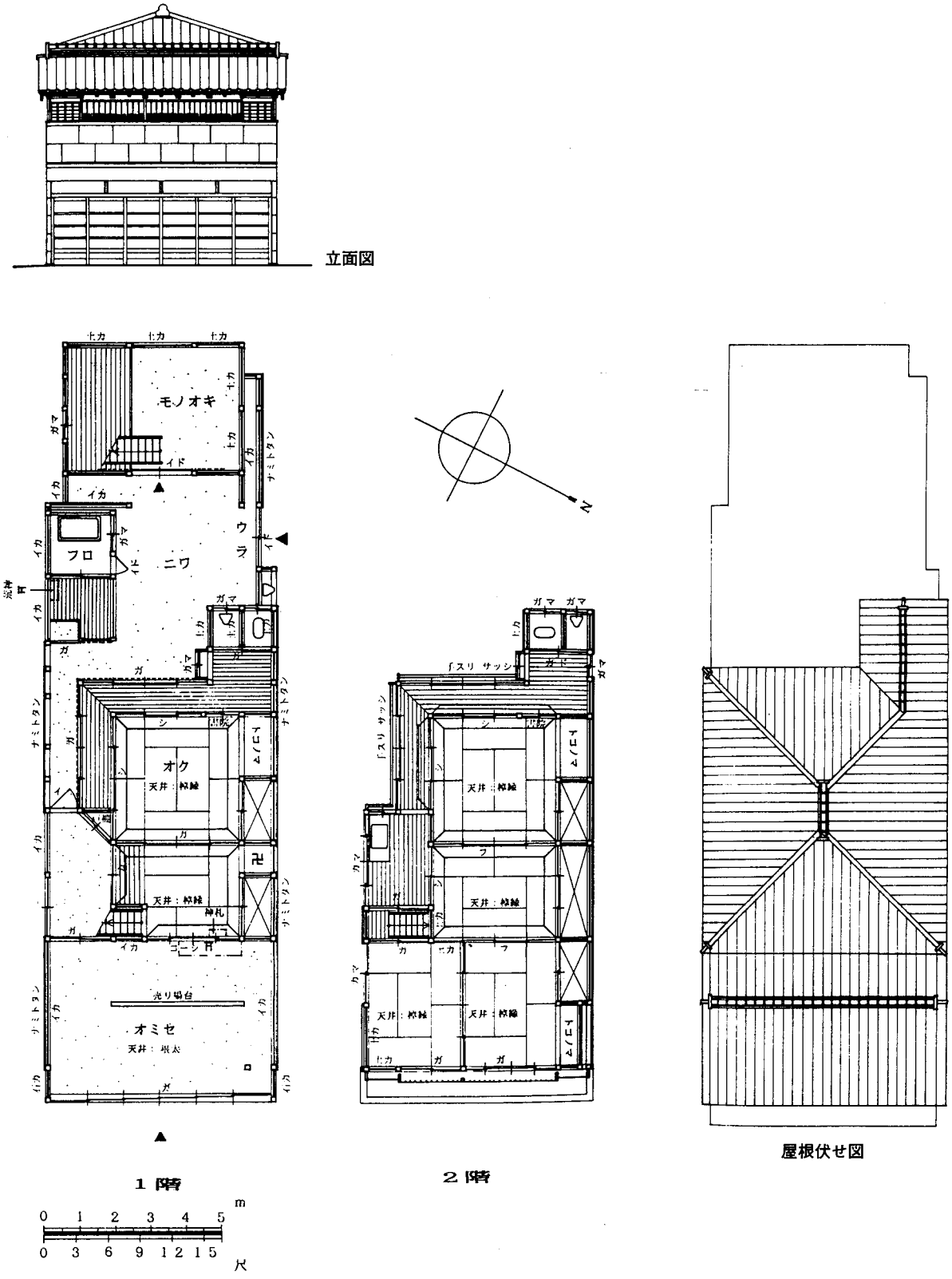
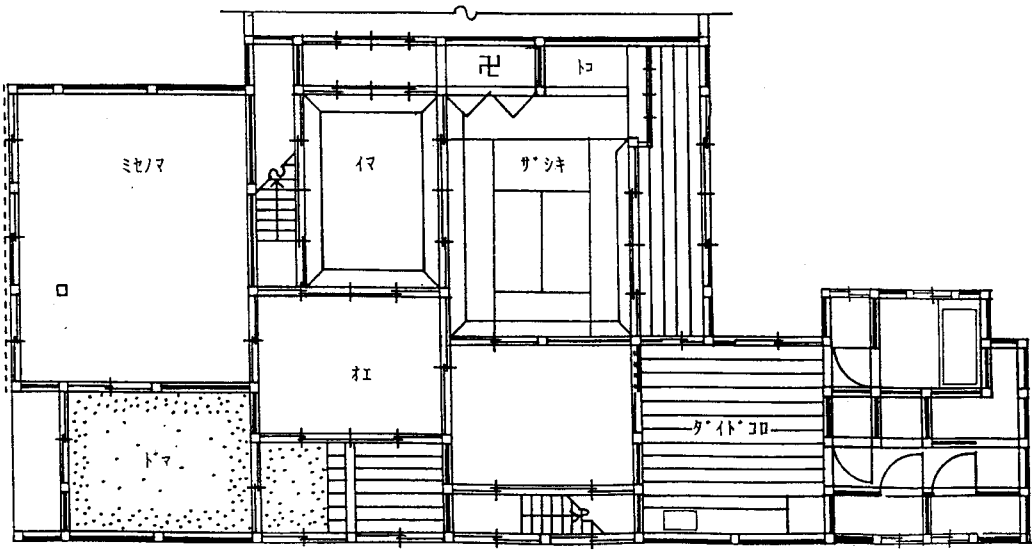
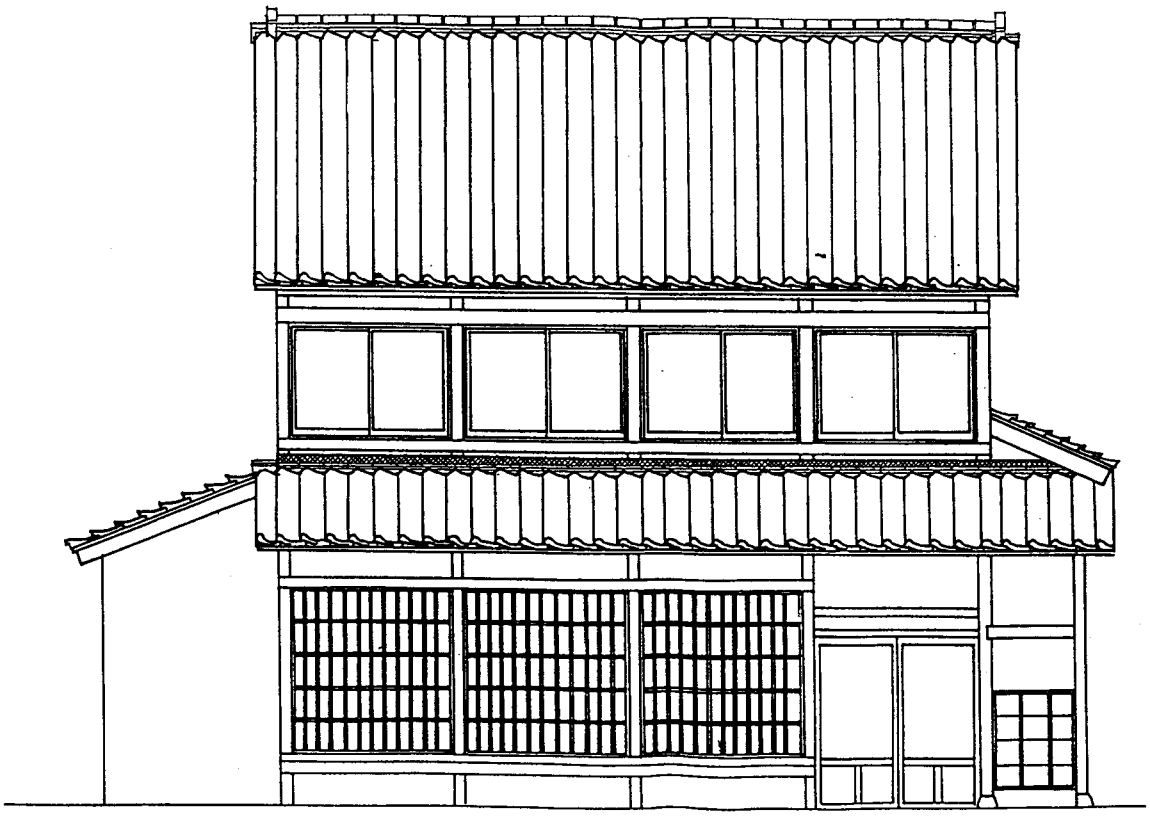


図6　板橋／五十嵐茂家の家屋図（『板橋区史・資料編5・民俗』より）



1階平面図



立体図

図7　石川県野々市町／西尾松夫家の家屋図（石川県野々市町史編纂室より提供）

最後に、遊郭の民俗事例について見てみましょう。まず遊廓の店の開始にあたり何事も無いよう祈願する意味での玄関の塩盛りのしきたりがあります。また、毎日夕刻になると下足番が下足札を束ねてガシャガシャ音を立てる慣習もありました。こうした面においても江戸などの「トカイ」的要素が板橋の「マチ場」に即反映していた点が注目されました。

板橋の近世における民俗関連事例は以上です。

❻「マチ場」における民俗事象の感覚表現

民俗文化の色彩感覚とその意識構造

次にマチ場の感覚表現という点を考えていくときに、色彩のようなものをどのように捉えればよいのか、ということを民俗学の立場から考えてみたいと思います。

図8に示しましたように、日本人にとって色の意識は白あるいは無色を基準にしています。つまり、日常生活で生命力を維持する「ケ」というものを仮に色で表現すると、白あるいは無色の世界を基準に考えているのではないかと思います。その生命力が衰退する、つまり「ケ」の力が衰えるという状態が「ケガレ」です。

従ってその場合の「ケガレ」とは、白あるいは無色が何らかの別の色に変化を起こした状態を指していて、むしろ無色が有色に変わることを古来から人々は恐れてきたことが考えられます。

そこで、そうした衰えた「ケガレ」状態から脱するために、神仏の力を借りなければなりませんが、同時に色彩自体が持っている作用を意識的に加えていきます。それが、白色・赤色・青色・五色などの色彩であり、色彩の呪術的な力を意識的に使っていったのではないかと考えます。ここには変化した色の状態を色でもって元に戻そうとする構造があります。

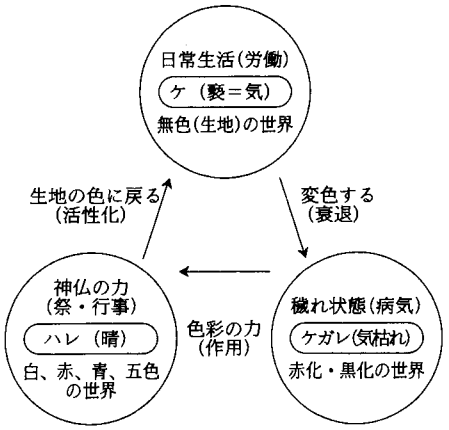


図8　色彩とハレ・ケ・ケガレとの関係図

特に「マチ場」の場合は、まず色で構成する「マチ場」表現とはいったい何なのかということが問題になります。従ってこのような視点からマチ場を見ると、都市は理解しやすいのではないか。一つは、農村の人たちから見ると、「マチ場」という社会は極めて色彩に溢れた穢れた社会、常に人工色に満ちた「ケガレ」状態の社会に見えると思います。一方「マチ場」の中の人たちも、自らの「ケガレ」状況に住んでいることを無意識のうちに感じていて、それは有色文化の変質の問題として関わってきたからではないかと考えます。

板橋の色彩表現に見る「マチ場」的性格

さらに板橋の色彩事例を見てみましょう。かつて晴れ着で紫地の着物が流行しました。これは板橋に限らず、明治以降に紫色の志向が全国の都市に浸透し展開したからだと考えられます。

また、呉服屋の番頭の茶縞、あるいは黒と黄色の木綿帯などのカラフルな色が流行しています。元来、黄色という色を使うのは、基本的に農

村社会ではあまり見られない性格の色です。これは近代の何らかの感覚的な影響を受けているからと考えられます。

また、板橋ではかなり早い時期に黒色が志向され、明治期の終わり頃の結婚式には黒の紋付き、留袖が着られていました。この傾向は茨城県などと比べると、かなり早い流行と言えます。ここでも何らかの「トカイ」感覚の影響があったと思われます。

また、結婚式のお色直しという習慣もここでは早い時期に定着したとみられ、既に明治期には出てきます。元々お色直しという言葉は「結婚後三日目または出産後の一〇一日目に新夫人または産婦・産児が白小袖を着用するか、もしくは室内装飾などを色のあるものに取り替えることを言い、今日では結婚当日に新婦が式服を脱いで別の衣服に改めることを言う」（広辞苑）もので、板橋では江戸褄から黒の着物（留め袖）に、さらに訪問着に着替えるとしたお色直しがありました。

また板橋では結婚後の一年間の春秋の祭りに際し、新婦は髪を島田に結い黒の江戸褄を着用して再度婚礼時の装いで神社に参り、地域に対する顔見せを行ったその一時間後に、錦紗の柄の重の着物に着替える「しっかえし（お色直し）」という儀礼が行われたもので、こうした結婚式とは別の形のお色直しの慣習があることに注目されました。ちなみに、これは日本海側の奥能登の鳳至郡一帯に、昭和三十年頃まであったゲンゾマイリと称する儀礼に酷似しています。

さらに板橋では葬式には基本的に白色を着用したが、第二次大戦前は女性たちはこのシッカエシ（ヒッカエシ）のときに着物の下に着用していた白羽二重を着るもので、帯や足袋、履物の鼻緒まで白づくめとしていたことが伝承されているようです。

このことからお色直しとは本来、白の衣類に改めることを意味した言葉で、この場合の「色」とは「白」を指し示した言葉ではないか、とも考えられます。

一方、白色の民俗事象に相対するものとして赤色の民俗事象があります。

大正期に板橋では、子供が誕生して七日目の祝い「お七夜（オシチヤ）」には、産婆が赤子を抱きながら「寿」の字を書いた紙に紅白の水引を掛け、井戸とハバカリ（厠）に貼ってお参りするという儀礼が行われていました。こうした誕生儀礼にはどこか洗練された美意識が感じられ、本来は江戸時代の大名家など上級武士の習俗としてあり、明治以降に民間にも流布した可能性があるように思われます。

また、婚礼のときに桜湯とオチツキノモチを必ず客に振る舞うという儀礼がありました。これも農村的というよりもトカイ的な性格のもののように考えられます。

また板橋の大山地区はマチ場化した地域ですが、かつて火事のとき消防の纏持ちが屋根の上でバレンを振るなか、側にいた婆さんを捕まえて、その婆さんの赤い腰巻きを「すぐに脱げ、早く出せ」と言って取り上げたもので、その腰巻きを長い竹竿の先に付け、纏持ちは火に向かって旗のように振ったり突き上げたりしながら、火災が類焼しないよう呪的な仕草があったと言います。

こうした火災時の腰巻きに因む火除けの呪いは、全国的に家屋が密集した都市的なマチ場に共通した民俗と見られ、例えば北陸の城下町では、火災を引き起こすのは烏天狗の仕業で、天狗が火をつけて回るから、天狗が最も嫌う不浄のモノである女性の腰巻きを纏の替りに振るのだ、と説明しています。こうした習俗は昭和三十年頃まで続いていました。

従って板橋の都市性は江戸時代からのもので、江戸や東京に隣接している地理的条件にその大きな要因があるのでしょうが、なかでも特に色彩事象のなかにそのことが読み取れると思います。

この傾向は例えば、洋装の移入の経緯を辿ると、明治四十四年に遊郭の娘さんたちが洋服着用することから始まって、次第に板橋全体に広

まっていったと言われています。それは板橋の遊郭が、感覚表現の世界では常に先端をいく性格を持っていたという点で、注目されます。つまり、板橋の都市化は、その生活慣習や民俗文化において、遊郭の存在をはずしては決して考えられないということです。

他方「マチ場」の刺激性といった点を考えると、そこには単なる「トカイ」化の影響というよりも、感覚の情報的なものの移入によって否応なく変革を余儀なくされていく「マチ場」の地域性が、板橋の場合にはかなり早い時期から展開していたのではないか、と考えます。

以上が、私が現在考えている都市の地域特性に関する事例報告の総てであります。

（東京家政学院大学人文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇一年十二月二十一日受理、二〇〇二年十月十一日審査終了）